特集2 宇都宮二荒山神社

昨年8月に新しく宇都宮二荒山神社の宮司に就任した阿部憲さん

にぎわいの中から新しい発展が生まれます。

宇都宮二荒山神社 新宮司・阿部 憲さんに聞く

宇都宮市の中心にある宇都宮二荒山神社。
昨年8月、新しい宮司として阿部憲さんが就任しました。
市民の心のシンボルである同神社のトップに、お話をうかがいました。

昭和45（1970）年、大阪万国博覧会の年に大学を卒業した私は、無事に神主の資格を取得し、東照宮に奉職が叶いました。自分では一生お勤めさせていただこうと考えていたのですが、昭和56（1981）年に宇都宮二荒山神社に奉職することとなりました。当時の宮司が私の父と同郷だった縁で、声をかけていただいたのです。最初は迷いましたが、その頃父が亡くなり、母が宇都宮市で独り暮らしをしていましたので、心を決めました。それ以来36年間、宇都宮の街を神様にお仕えしながら見守りいただいています。

神社も時代に合わせて変化を

私は、自宅から神社まで、よく歩いて来るのです。そうしますと、街の様子がよく分かります。大きく変わったところも、昔からずっと変わらないところも、体で感じることができます。神社はいつの世も変わらないものと思われる方が多いでしょう。もちろん、根本のところは不変ですが、時代に合わせて変化するところもあります。私は、守るだけではなく変わることも大切だと考えています。街を歩いていると、特にそう感じられます。

こちらに移って来て、改めていろいろなことを勉強しました。例えば豊城入彦命（とよきいりひこのみこと）は、『日本書紀』に「自ら御諸山に登りて、東に向き、八回（やたび）搔槍（ほこゆ）し、八回（やたび）撃刀（たちう）す」とあります。これは、実在の人としては初めて、武芸について記述された箇所ですから、日本で最初に槍や刀をふるったのは豊城入彦命であると言っていいと思います。そういう神様にお仕えすることになったのも、剣道のお導きではないかと感じ入りました。

私は現在、69歳です。全国的にみても、70歳近い人間が宮司になるのは、珍しいことだと思います。というのも、宇都宮二荒山神社のように大きな神社の場合、行事も多く、またさまざまなお付き合いも出てきます。それに「経営」という側面も無視できません。神職だけで13人、巫女さんなどを含めると30人以上の大所帯です。ただ神様にお仕えするだけではなく、いかに運営していくかという「経営者としての顔」も必要になるのです。

ですから本来は、もっと若く、気力も体力も充実している年齢のうちに、宮司になる事が望ましいと思います。そこで私は、定年制を設けました。こういう小さな事でも、神主たちのやる気が変わってきます。

宇都宮二荒山神社宮司
阿部 憲（さとし） 氏

昭和21年11月生まれ。同45年、國學院大學卒業後、日光東照宮に奉職。56年、宇都宮二荒山神社に奉職。56年権禰宜、57年禰宜、平成9年権宮司に就任後、平成27年8月1日より現職。青年神職むすび会会長、教化委員会委員長などを歴任。現在、栃木県神社庁教誨師、栃木県実業団剣道連盟会長。剣道は教士七段。

毎年、初詣にはたくさんの人が訪れる宇都宮二荒山神社

昭和56年に宇都宮二荒山神社に奉職

私は生まれは烏山町（現・那須烏山市）ですが、小学生の時に宇都宮市に引っ越して来て、少年時代をここで過ごしました。親は教員でしたので、神社とは何も関係のない家でしたが、街中は私たちの遊び場でしたから、この宇都宮二荒山神社にもよく遊びに来ていました。当時は、まさか自分がここの宮司になるとは思いもよりませんでした。

子どもの頃から剣道をやっていて、高校を卒業する頃には一生続けていきたいと思うようになりました。國學院大學の史学科に進み、就職を考えるようになった時、頭に浮かんだのは日光東照宮のことでした。

日光東照宮は徳川家康公を祀っておりますので、多くの武人に信仰されています。剣道とも関わりが深く、私も試合に出たり合宿をしたりして、思い出深い場所でした。そこで、神職になって東照宮に奉職したいと願うようになったのです。

てきます。それに「経営」という側面も無視できません。神職だけで13人、巫女さんなどを含めると30人以上の大所帯です。ただ神様にお仕えするだけではなく、いかに運営していくかという「経営者としての顔」も必要になるのです。

ですから本来は、もっと若く、気力も体力も充実している年齢のうちに、宮司になる事が望ましいと思います。そこで私は、定年制を設けました。こういう小さな事でも、神主たちのやる気が変わってきます。

モチベーションを生む努力は、神社でも大切なのです。

祭は庶民の信仰の証（あかし）

信仰の形は、世につれて変わるものだと思っています。神様だって変わるのです。例えば菅原神社は、今でこそ学問の神様ですが、あれはもともと菅原道真が太宰府に流されてそこで亡くなった後、彼を陥れた人たちに次々と祟りがあったので、怨霊の怒りを鎮めるために建立されたものでした。それが時代とともに変化して、今のような信仰の形になったのです。

ですから例えばお祭りなども、私は時代に合わせて変わるところは変わってもいいと思います。もちろん、精神は不変でなくてはなりませんが、その一方で市民に愛される、市民が喜んで参加できるように、いろいろな変更を行うことは悪いことではないでしょう。古い祭を復元するのはすばらしいことですが、時代に合わせるべきところは合わせなければ、何のためにやるのか分かりません。祭というのは、庶民の信仰の証です。ですから、できるだけ多くの方にご参加いただき、にぎわいになっていただきたいと思います。

例えば菊水祭は、例祭である秋山祭の付祭として、江戸時代初期から現在まで続いています。ですが、祭の日をとってみても、何度も変わってきています。巡行も、昔は徒歩や馬、牛を使いましたが、最近はオープンカーも登場しています。将来は牛馬の手配は難しくなるでしょう。そんなふうに、少しずつ変化してきています。根本にある精神を失わなければ、変わることは良いのです。

宇都宮市の発展のお手伝いを

祭や、それを支える信仰は、文化です。文化というのは、常に発展し続けなくてはいけません。停滞してしまって遺跡になってはだめなんです。

街の発展というのは、にぎわいが大切です。にぎわいの中で人々がコミュニケーションをとり、そこからさらに発展していくものです。祭がにぎわいを生めば、それが街の活性化、発展につながっていきます。二荒山神社の祭礼も、そうしたにぎわいを生むきっかけにならなければと思います。

最近は、なかなか街のにぎわいが戻らず、何となく気持ちが落ち込みがちです。けれどもそういったことは、今が初めてではなく、昔から何度もありました。先人たちはその都度知恵を出し合い、汗を流して、乗り切ってきたのです。ですから私たちも、そうした先人の知恵を学びつつ、新しい知恵を出して、がんばっていかなくてはなりません。

今年は申年（さるどし）です。「申」には「形ができあがって完成する」という意味があります。今年は、いろいろなことが新しい方向へ向いて、完成に近づく年になるのかも知れません。そうなるよう、私たち二荒山神社としても、陰ながらお手伝いをさせていただきたいと思います。

また、今年は宇都宮市の市制120周年です。新たな気持ちで、宇都宮市の歴史や文化に触れる機運も高まることでしょう。そういうことについても、いろいろなご協力ができると思います。ぜひ二荒山神社をご活用いただき、より大きな街のにぎわいを生み出していって欲しいと願っています。

column

産業振興にも深い関わりのある御祭神、豊城入彦命

宇都宮二荒山神社の御祭神は豊城入彦命（とよきいりひこのみこと）です。この神様は第十代崇神天皇（すじんてんのう）の第一皇子で、上毛野君・下毛野君の始祖と『古事記』に書かれています。

古くから武人に信仰され、藤原秀郷や源頼義・義家親子、源頼朝など、多くの武将が戦いの前に戦勝祈願をしています。また、火防（ひぶせ）信仰も古くからあります。

それから、実は商業振興とも関わりが深い神様です。豊城入彦命の五代後の子孫に多奇波世（たけはせ）という方がおられます。その曾孫の久比は、『三国志』にも登場する呉国からわが国に秤を持ち帰った人です。天皇から「これは何だ」と問われた久比は「さまざまなものを、これを使って計り、それを元に売り買いするのです」と答えました。この久比の子である宗麻呂が「商長首（あきおさのおびと）」という姓を賜ったと、『新撰姓氏録』に書かれています。

ですから、二荒山神社は商・産業振興と、深い縁を持っているのです。